

鳥羽市・答志のアラメ海中林の再生に向けて

三重県鳥羽磯部漁業協同組合 濱口輝満

伊勢湾の入り口に位置する鳥羽市は有人離島である神島、答志島、菅島、坂手島を含むその全域が伊勢志摩国立公園の中にあり、その豊かな自然に支えられた漁業、観光業が主要な産業となっている。複雑な海岸線、海底地形、伊勢湾内の海水と太平洋の海水が激しく行き来することから地先沿岸は豊かな漁場になっている。沿岸漁業を主として行なっており、アワビ、サザエなどの磯資源も漁獲している。それらの生活の場ともなる大型海藻の群落である「藻場」、特にアラメ、カジメで構成される藻場は海中林と呼ばれ、広大な海中林が沿岸の動物にとって非常に大切な役割を果たしている。

ところが平成5年頃からアワビの水揚げ量が激減した。気づけば豊かだった海中林が減少し、特に答志島の伊勢湾側では消失してしまった。アワビの稚貝放流も実施したが、目立った効果は見られなかった。海中林の再生なくしてアワビ資源量の回復はないということで、アラメの種苗生産を行っていた鳥羽市水産研究所に協力を求め、平成17年から答志島の海中林再生活動を始めた。研究所で育てたアラメ幼体を鎖や自然石に取り付け海底に設置したが、横倒しになったり魚に食べられたりして失敗した。そこで青壮年部員もSCUBAのライセンスを取得し、持ち前のチームワークで、海底に設置したアラメを食害防止網で覆うことにより、なんとか1年間アラメを育てることができた。このアラメを本来海中林を回復させたい波の荒い場所に移植した。地元漁師が中心となったこの取組は、環境改善への姿勢と簡易な手法が評価され、平成21年の農林水産祭において天皇杯を受賞した。その後、地元の市立答志中学校が環境教育の一環として本活動へ参加し、隣に位置する菅島でも青壮年部と市立菅島小学校による海中林再生活動が始まるなど、活動の輪は広がり現在まで続いている。

しかしながら、本来増やしたかった海中林消失海域での再生には至っていない。原因は魚による食害や伊勢湾内海水の濁りなどいくつか考えられるが、詳しくはわかっていない。それでも、海辺に暮らす自分たちが活動しないと始まらないという意識が芽生え、活動も根付きつつあり、何より、海中林など海への理解も深まってきていることは意義深いと考えている。これからは人口減少に伴い、青壮年部員も減少し、自分たちだけで海中林再生活動を継続することは困難になると予想している。今後は、大学や民間企業にも参加してもらうなど、活動の輪をさらに広げていきたい。